

国語「光村図書」

検討のポイントにした点の一つ目は単元の一番最後に一覧で見通しを持てるようなページがあることである。特に光村図書が本校児童に合っていると考えたのは、まず問いをもつところがあり、児童が文章について問題意識をもって、学習計画につながっていく構成になっている。児童の興味から学習が始まるというところが、主体的に学習に取り組むきっかけにできるのではないかと考えた。どう生きるかの問題解決力の醸成にもつながってくる部分である。二つ目は、言語活動の例について、調べたことをポスターにして学校の仲間に伝えたり、地域の人にインタビューしたりする目的が学校の外に向けた言語活動が多くある。どう生きるかで育みたい貢献する人間性について、誰かのためにという意識で、国語の授業でも取り組めることがすごくよいと考えた。また、QRコードのコンテンツに、児童が問いを生み出すことにつながるような動画が、単元ごとにも位置づけられている。詳しい解説ではなくポイントを押さえたものが取り揃えられていることが本校児童に適していると考えた。

Q 光村図書の問題解決のステップが本校児童に合っているのか。

A A社は、ステップの最初に「朗読しましょう」と目標が示してある。光村図書はその目標の前に、まず物語を読んでどこに共感したり、なにを感じたりしたかと児童が問いをもつ項目が単元ごとに位置づいている。児童に問いがあるから目標につながるというように、児童が教師から与えられる課題ではなくて、自分の願いをもとに学習をスタートできる言語活動が組みやすいのは光村図書だと考えた。

書写「光村図書」

教科書を見た時に、課題がつかみやすい構成になっている。ポイントを分かりやすく書いてある。A社は、たくさんの情報が書いてある。児童がどちらの方が課題をつかみやすいのかと考えた時に、光村図書が本校児童に合っていると考えた。上手な字と、良くない字が比較できるような構成になっているページが多い。児童が問題を見出しやすいと感じた。QRコードのコンテンツが豊富で、どう生きるかとの繋がり、他教科との繋がりが示されており、学習したことを他の教科でこのように生かせるという関連動画が多数位置づいている。教科横断的な指導や、どう生きるかにも生かせると考えた。

Q QRコードのコンテンツの内容はどんなものがあるのか。

A 例えば、紙や墨の使い方だけでなく、手本が充実している。また、SDGsにつながることや、他教科との関連もあり、国語でパンフレットを作ろうというときに、ここに載ってるものを関連させて活用できる。

社会「東京書籍」

本校で育みたい貢献する人間性に関わって、特に社会科は世の中に関わっていく教科なので今日的な課題に関わることを中心に、単元で学習してきたことを生かして、社会的な事に参加したり、提案発信したりという学習場面が位置づけられている部分と、本校社会科として市民性を育

成することを目指しているので、その点について適していると考えた。また、教科書に話合いの方法が例示してある。学べるポイントで必ず話し合おうという場が位置づいている。既存社会のあり方を見直すことや、それを踏まえて互いの考えを伝えたり、尊重し合うことを通して、自らが生きる社会のより良い在り方を考え、社会に参画する児童(生徒)を育てるために有効である。本校は6年生で中学校の歴史を先行実施している。そのため、歴史の用語が詳しく書かれている点について、小中の教科書を見比べながら学習をする本校の児童の実態に合っていると考える。また、単元の内容と、他教科の領域の内容との関連が示されている。興味関心の高い本校児童が主体的に学習を進めるのに適している。家庭学習についても補完することができると考えた。

Q 教科書の言葉が詳しく書いてあることによるよさを説明してほしい。

A 言葉の説明が丁寧に示されており、後期課程の学習を先行して実施するときにも、立ち返って確認することで理解しやすいと考えた。

地図「帝国書院」

日本では、地方ごとに100万分の1から50万分の1の地図の順になっており、比べながら見られるようになっている。さらに、100万分の1のページに「くわしく見る地図〇〇ページ」とページ数が指定してあり、分かりやすくなっている。さらに、キャラクターの多様な「問いかけ」によって、「地図マスターへの道」の学習活動が進み、地図の見方を深められるようになっている。自然、災害と防災、産業、貿易など幅広いテーマの資料図、統計を20ページにわたって掲載しており、これらを比較・関連させて考察することで、後期課程の学習にもつながる地理的な見方・考え方を育むことができる。様々な資料を自分から求め、比べたりつなげたりなど見方・考え方を働かせながら学ぶ附属小中学校の実態に合っており、より主体的に学ぶ学習につながり、どう生きるかとの関連を考えると、本校児童に適していると考えた。

算数「大日本図書」

小中学校算数科部の方では、大日本図書の楽しい算数を推薦しようと考えている。理由は大きく二つある。一つ目は本校の算数数学科の研究について、知識・理解よりも思考力、判断力、表現力というところに重点を置いている。小学校の算数においては、文字や式がそれほど充実していないところで、図やブロックを根拠にして、児童が論をつくる。大日本図書はその系統がより明確で、本校の児童に合っている。二つ目は、大日本図書は、1年生以外は合冊になっており、これまでの単元と同じように考えたり、前の単元ではどういうふうに行ったのかいうところで、前のところを読み直したり見直したりすることができる点が児童にとってはよいと考えた。

理科「大日本図書」

本校の理科部では、「自ら科学的に探究する力」に焦点を当て、実践を重ねてきている。児童が問いや疑問から、問題化するところを大切にしている。例えばA社を見ると、既に問題が同じページの中に書かれているので、児童の気付きから問題化するというよりは、示された問題について考える内容になっており、本校の指導とは合わないと考えた。大日本図書の資料を見ると、単

元末に、日常生活や社会との関連についての記載が多数ある。本校のどう生きるかで育む貢献する人間性とも関わって、児童が、自分の学びが日常生活の中でどのように活用されているのを知ることが、非常に重要だと感じている。そのため、本校の児童に適していると考えた。

Q 大日本図書が本校に合っている理由を教えてください。

A 問題を示すのではなく、見方・考え方や視点を示し、児童が問題化できるようになっているところが本校理科部の指導の流れに合っている。また、日常生活から社会につながるような記載が多くあり、どう生きるかの学習とも関連しやすいと考えた。

Q 道徳教育との関連について、大日本図書の特徴は何か。

A 教科書の中に、道徳的諸価値に触れるところが位置付けてある。そのため、道徳的諸価値に触れながら理科の学習ができる。

生活「東京書籍」

探求のサイクルが「課題の設定、情報の収集、整理分析、表現」と分かりやすく位置付けられている。これは、どう生きるかでも大切にしているサイクルであるため、本校児童にとって合っていると考えた。ICT活用について、どの教科書も巻末に活動を円滑に進める活用方法は示されているが、東京書籍は、それに加えて留意点、気を付けるポイントがあり、情報リテラシーの面も明示されている。本校として、情報リテラシーは課題であるため、位置付けがあることは有効である。2年生で扱う教科書の後半には、社会科や理科との関連を図った学習活動があり、学習を関連付けて続けられているようになっている。本校で、どう生きるかを進めるときに、児童が好奇心をもって、やってみたいという思いをもって学習する姿があるので、探究のサイクルが位置付き、ICT機器が適切に使えるような示し方がされている東京書籍の教科書が適していると考えた。

音楽「教育芸術社」

どの学年についても巻頭の学習マップに四つの領域が掲載されており、この領域が6年生までどんどん積み重なって学ぶということが示されている。紙面の校正について、教育芸術社はどの教材曲に対しても学習活動が児童の目線で示されている。それに沿って学習することでねらいが達成されるという構成になっている。多くの情報があり、そのようなヒントをもとに自分たちで考えて学びを進める本校児童の実態に合っており、使いやすいと考えた。また、本校音楽科では仲間と関わる学習活動を大切にしている。児童が仲間と学習を進めるときに、教科書に詳しく段階を追った示し方がしてあり、発展的な学習をさせやすいというところもある。教科書の書き込み部分について、メモの欄が多くあり、段階的になっていたり、思考を助けるための発言例や例示が多くあったりして、児童が主体的に学習を進める本校の実態に合っていると考えた。

図画工作「日本文教出版」

日本文教出版の教科書には、発想とか材料の広がりがある。例えば、袋に新聞を詰めて形を作る題材について、さらに紐で縛るというように、もう一つ材料や技能の例が示されるので、その

分児童が表現できることが増えている。図画工作の学習に意欲的に取り組める本校児童に適していると考えます。また、特に写真や紙面の構成が工夫されており、写真集のように構成されているので、同じ題材でも児童が見たときに、様々な角度とか背景にこだわっているため作品が恰好よく、児童の表現の幅を広げ、創造性を培うことができると考えました。

体育「東京書籍」

児童が保健の学習を日常に生かすことが本校の課題である。その視点で、怪我の防止の題材を見ると、東京書籍は、導入から日常生活に結びつけていけるような構成となっている。導入でイラストを示して、どこで何がをしやすいかを児童が自分でどんどん考えながら学習できる。また、地域での生活の学習内容でも東京書籍は、書き込みながら自分の考えをまとめられるような構成になっている。学習のステップが、導入で「気づく・見つける、次に調べる・解決する・深める・伝える、最後にまとめる・生かす」というように、どう生きるかの探究のサイクルにも合っており、本校の児童に適していると考えました。ICT 機器の活用について、東京書籍は QR コードのコンテンツに資料や動画に加え、ワークシートもあり、それを使って自分で学びをつくっていけるところが、教師主体ではなく、児童が主体的に学ぼうとする本校の実態に合っている。

家庭科「東京書籍」

家庭科の学習は、自分たちの生活の中から課題を見つけ、取り組み、次の生活に生かすというサイクルを進めていく。両者ともそのステップにそった構成となっている。本校の児童の実態を考えたときに生活経験が少ない児童が多いことがあり、ヒントになる参考資料の見やすさという点で東京書籍が本校児童に合っていると考えました。調理実習について根拠がグラフで示されていたり、切り方の手順がついていたりしていることが、児童が学びに生かせそうだと考えた。後期課程で東京書籍を採用しているため、教科書の中の所々に中学校ではこの学びがあるという関連した事項の記載があったり、表記の仕方も統一されていたりするので、前期課程と後期課程の学びの繋がりを考えると、東京書籍がよいと考えました。

Q 問題解決という点において、本校児童に合っている点はどこか。

A 経験の少ない児童が多い本校の実態を考えたときに、次のような点が挙げられる。調理の学習において、野菜などの実物画像が多く、視覚的に分かりやすくなっている。裁縫の学習において、よい手本だけでなく、よくない事例もあり、自分の作品と比べやすくなっている。グラフ等の意図など解説があり、本校児童の経験の少なさを補い、どの子どもが学習を進められるようになっている。

外国語「東京書籍」

どう生きるかに関わって、どの教科書についても問題解決力については育めると感じた。関係構築力、貢献する人間性という点について、東京書籍は、グループで一つのものを作り上げるという活動があり、その活動の中で関係構築力だけでなく、貢献する人間性が養われると考えました。本校児童の実態を考えたときに、外国語活動から外国語になる5・6年生になると、意欲が

下降傾向にある。書く活動に苦手を感じる児童が多い。東京書籍は単元末ごとに書く活動が5年生から続けて位置付いており、児童の苦手意識の軽減につながると考えた。本校英語科で実施しているラウンド学習に関連して、東京書籍は単元末の活動において、決まった英語の表現を話すのではなく、表現に幅があり、児童が既習も含め学習したことを生かして表現できる言語活動が位置付いている。児童の実態を考えたときに、話す内容や構成を自由に考え、取り組める東京書籍の教科書は本校児童に合っていると考えた。

道徳「光文書院」

1年生の教科書において、年度当初のイラストの資料が充実している。1年生の導入として入りやすいと考えた。各学年において、道徳の学び方のページが多く、学習の流れ、話合いの仕方などガイダンスが丁寧である。どう生きるかとの関連を考えたときに、問題解決の方法が示しており、授業展開の終末には、生活につないだり、考えを見直してみたり、多様な問いかけが示されている。関係構築力については、低学年はあいさつなどのスキル、中学年ではアサーション、高学年では互いに折り合いをつけるというように、発達段階に応じて示してある。